

岡崎由夫先生と釧路市立博物館

石川 朗*

去る8月21日、北海道教育大学名誉教授(地質学)の岡崎由夫先生が亡くなりました。先生が地域の地学研究ならびに博物館の諸活動に計り知れないご尽力を重ねられたことは誰もが知ることで

です。著者にとって小稿の任は、専門分野が異なる上、二十年ばかりのご交誼を思うと適切とは言えませんが、先生と釧路市立博物館の関わりについて幾つかご紹介させていただきます。

先生は1924年釧路村別保でお生まれです。1948年に東北大学理学部岩石鉱物鉱床学教室を卒業、同年4月東北大学理学部の副手として研究生活がスタートします。翌年北海道立釧路高等学校に教諭として赴任、1950年に北海道学芸大学に異動され、1964年に教授に任ぜられます。ご退官は1988年ですが、同年開学した釧路公立大学で引き続き教鞭をとられ、多くの人材の指導にあたられました。

先生の主要な研究課題は、釧路湿原を中心とする地史の解明です。その契機になったのは1953年に別保橋架け替え工事現場で釧路湿原がかつて海であったことを証明する自然貝層の発見でした。先生は当時を振り返り「目を疑い、足がふるえ、興奮した…」と記しています。この調査成果は地質学会など専門誌に次々と発表され、湿原の地質と地形の基礎が築かれました。釧路博物館新聞に始まる館報には先生の地学に関する報告や論文は共著も合わせ51編が所収されています。その嚆矢である「釧路原野泥炭地の形成」(1954. 釧路博物館新聞 No.29)はまさに記念碑的な論文です。また、釧路湿原総合調査(1971~1974年)、道東海岸線総合調査(1976~1982年)、阿寒川水系総合調査(1989~1992年)でも中心メンバーとして貴重な地史データを報告されました。

先生のフィールド調査は愛車「カブ」に乗り、道のあるところないところかまわず縦横無尽に行われました。その「カブ」に1958年から一人の青年が相棒として同乗することになります。

それは東釧路貝塚の調査員として乞われ、釧路駅

に降り立った、後の第10代館長澤四郎先生です。

この出会いによって先生の学問領域は考古学にも裾野を広げ「道東の貝塚や遺跡を駆け巡り、また、各地の発掘調査にも数多く参加」されることとなります。こうした成果は、博物館や管内の教育委員会が行った26の遺跡の発掘報告書に遺跡の地形や地質、花粉分析結果として著されています。

筆者は幣舞遺跡の火山灰分析のため財団法人北海道埋蔵文化財センターの花岡正光さんを招へいた際に、岡崎先生をお誘いし釧路管内中の露頭調査を行なったことがあります。この時先生は72歳。花岡さんは我々と同様に崖を登り下りするご壮健ぶりに驚いていました。

先生は博物館協議会、春採湖審議会、釧路考古学研究会などの委員や役員などを通して、地学教育における博物館の役割についても提言されています。



岡崎由夫先生(左は15代館長 西幸隆先生)

写真は2006年に行われた釧路町天寧1遺跡の調査現場で撮影したものです。この調査では縄文中期後半の貝塚が発見されました。湿原下の自然貝層と縄文前期の東釧路貝塚の関連にいち早く着目した先生ですが、湿原化が進行する過程で形成された貝塚遺跡を見て新たな研究意欲が生まれたことを想像します。

LUCKY-STRIKEの紫煙ごしに、いつもまっすぐな眼差しを向けられる岡崎先生でした。

享年91歳、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。